

「艦娘グラフィティ 3」(第7部) <清霜の春>

しろっこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

くきつと気持ちは通じるよね？

アタシ、横須賀鎮守府所属の駆逐艦“清霜”が、防衛次官といっしよに、美保鎮守府の視察に往くのであります！

《第1回》ハーメルンSS小説コンテスト

特別賞受賞作品

「艦これ」二次創作である、美保鎮守府シリーズの一環ですが、短編です。ので、単独でもお楽しみいただけます。

むしろ今までの「みほちゃん」愛読者には申し訳ありません。現在連載中の第5部のネタバレが含まれています。でも、きつとネタバレ程度は低いので、大丈夫……かな？

進水日がうるう年の艦艇を取り上げていますが、執筆者も初めて出会う艦娘なので、性格が公式とは微妙に違う恐れがあります。そこはコンテスト用なので、ご理解ください！

★お願い（注意）★

この作品は「艦これ」の二次創作です。物語内の艦娘を除くすべての内容に実在あるいは実在したすべての組織、艦隊や艦艇、歴史上の人物、メカニズムや機械類などは、現実のものとは無関係にフィクションです。それを理解のうえ、お楽しみください。架空のものにも拘らず、ご意見をされても、そもそもが実在しないモノです。一切お答えや対処は出来かねます。

〈清霜の春〉（読みきり）

目次

1

〈清霜の春〉（読みきり）

「ぜひ、訓練をお願いしますー！」

「艦娘グラフィティ3」（みほちん第7部）

：〈清霜の春〉（読みきり）

〈空軍定期便：機内〉

『こちら機長です。当機は間もなく空軍美保基地へ到着します。念のため各員、ベルトを着用してください』

アナウンスがあつて、アタシはベルトを締めた。機体は、さつきから日本海の上を飛んでいるんだけど。山陰ってさく冬の、この寒いとき、この地方つてさ、ほとんど曇天だつて聞いていたけど。今日は快晴だあ。でも機内は暖房入つてるの？暑つついわねえ、つたく。

アタシは清霜（きよしも）、横須賀鎮守府所属の艦娘。今日はしれーかんの命令で、山陰にある美保鎮守府に査察補助兼、見学！ということになっているの。だからアタシの隣にはさ、海軍省の事務次官が座っているんだけど。この温度のせいかな、さつきから居眠りしている。

海軍省の役人つて気楽よね。この次官は姉さんたちからは“切れ者”だつて聞いてたんだけど。起きているときは、やたら馴れ馴れしかった。寝顔は、まあまあ……かな？でもさ、よっぽど疲れていたのね。飛び立ったとたん居眠りして……あゝあ、人間つてのは、持久力が無いわよね。

人間つて言えば、今朝も鉄道で入間に行く道中、やたら握手を求められたりサインをせがまれたりして大変だった！アタシもいちおう、軍人だからさ、どつちも“ごめんね”つて言つて、お断りするんだけど。姉さんたちに聞いたら、去年の秋にブルネイで海軍の遠征部隊

と、シナがぶつかってから、急に海軍とか艦娘の人氣が高まったんだって。でもアタシ的には、街も歩きにくくてさ、ちよつと困るよな。

そういえば最近はさ、ブルネイの件があつてから、陸軍や空軍の態度が変わつたんだって。今では空軍も、定期便への便乗を簡単に許可してくれるようになったみたい。

そのブルネイ沖の海戦で、派手にドンパチやったのが、ブルネイでの実験隊と、今日訪問する美保鎮守府だって。だから、それからずっと全国の鎮守府からの見学が殺到してるんだって。横須賀からもずっと希望を出してて、やっとオツケー取れたんだよね。うちのしれーかんが海軍省の次官と顔見知りだったのが良かったって、姉さんたち言つてた。

海軍が注目されるようになってから空軍も協力してくれるようになって。山陰に行くのにも、空軍の入間基地から飛べるようになって。アタシも空軍の定期便に乗るのは初めて。空つてすつごいなあ。飛行機い？そうそう、海軍省の査察に同行するのも初めてだから、こつちもドキドキ。でも正直ドキドキも最初だけだった。こんな寝ている男の人が本当に、そんな力があるのかなあ……信じられないけど。

そういえば、うちの日向さんつて確か今日行く美保鎮守府から来たんだよね。代わりに……あいつが行っちゃったんだ。だから正直、今回の視察に行くのは嫌だった……でも、しれーかんの命令だから仕方が無いけど。

機体は、だんだんスピードを落としている。高度も下がってきて海の船が良く見える。なんだかすごくいい、オモチャみたい。アタシは地図を取り出した。えつとく向こうに見える細長い山が島根半島でしょ？その上にある施設が確か、空軍の電探基地かあ。あそこも前は、海軍には全然協力してくれなかったけど、今では索敵情報を流してくれるって、日向さんが言つてたな。

もう海に手が届きそうなくらい低いところを飛んでいる。すごい速いなあ、この感じ。このくらい海の上も走れたらいいのに。高度

がもつと下がって長い砂浜が見えたと思ったら、島根半島の方にクレーンや倉庫、レンガのような赤い建物がチラツと見えた。たぶん、あれが美保鎮守府だと思うな。噂どおり小さいところみたい……。

機体はオモチャのような林や農家を越えて広い飛行場に來た。速い、速い！ワクワクしている間に、機体が滑走路に着地。ズンと言うような軽い衝撃があつてブレーキをかけると、エンジンが唸りを上げている。あれかな？妖精さんの空母への着艦つて、こんな感じ？自分が妖精になつたみたい。覚えておこう、戦艦になつたときのために！
〈美保空軍基地：到着〉

美保鎮守府も小さく見えたけど、ここの空軍基地も、めっちゃちっちゃいな。窓から見える景色を見ながらそう思った。

「ん〜、良く寝たなあ〜」

事務次官が大きく伸びをしている。寝ぼけ眼（まなこ）の、ボーつとした彼を見ていると本当に中央の役人かなあ〜？つて思った。

「美保基地に到着です。機を降りたら、事務所で到着の受付をお願いします」

前のほうから機長さんが案内してくれた。旅客機も、こんな感じなのかなあ〜。

「や、ご苦労だつたね機長。えつと……清末だつたかな？じゃ、降りようか」

次官は立ち上がると、間違えた名前であタシを呼んだよ。さすがにムツときた。

「次官！私、清霜です、キ・ヨ・シ・モ。いい加減、覚えてよね！」

「あ、ごめんよ〜」

次官は悪びれもせず、笑つて返した。

「だつてさあ〜駆逐艦つて、みんな似たような名前だし、君の姉妹つてさ、軍服も似てるだろ？混乱しちゃつてさ〜」

本当に次官なの？この人……まったくもう。次官は、へらへらしながら後ろの座席に置いてあつた荷物を取りに行く。さすがにあタシよりは量が多くてスーツケースが二個？多いわね！アタシは自分の手荷物を持つたら、あれ？次官つたら、もう機外へ向かっている！意

外に行動が速いわ、この人。慣れてるのかしら？アタシは次官に続いて、少し駆け足で機外へ出た。

「ひゃあー！」

外は寒い！2月だもんね。えっと、向こうに白い山……あれ？何で富士山がここにあるの？

そんなアタシを見た次官が言う。

「ははは、驚いたか？あれは伯耆（ほうき）富士、大山（だいせん）っていうんだよ。この地域の富士山みたいなものさ」

「はあ？」

返事をしながら、アタシはもう一度、その白い山を見ていた。へえ、何とか富士って言うのか。その山を見ていたら不思議と、さつきまでの怒りが収まった。不思議い。

滑走路脇で軍用車がアタシたちを待っていた。担当官が言う。

「事務所へ参りますので、お乗りください」

「ありがとう」

次官が言う。なんか至れり尽くせり……ま、空軍基地も、それなりに広いし部外者をノコノコ歩かせるよりは、サツサと車に乗せて運んだほうが早いってか。2分くらい基地内を走って、アタシたちは事務棟へ案内された。その受付カウンターで、印刷された書面に、それぞれ名前を書いて、次官は印鑑を押していた……あれ？アタシ、印鑑なんて持ってないよ。

「えっと……拇印か、サインでもいいですよ」

受付の女性事務員さんが言う。

「サイン？」

アタシがカウンターで固まっていると次官が説明してくれた。

「ああ、自分の名前を直接……その“印”ってどこに書くんだ」

次官がそう言いながらペンを渡してくれたけど、そういえばアタシ、自分の名前を、あまり真面目に書いたこと無いんだっけ。思わずまた、硬直した。アタシが固まっていたのはホンの一瞬だったと思うけど、すつごく長い時間に感じられた。事務員さんと次官がこつちを見ているのが分かるし、ちよつと冷や汗ドキドキ。仕方が無いから、

書けるとこまでで良いだろう。

“清しも”

……って書いたけどさ。自分で恥ずかしくなった。アタシが無言で書類を事務員さんに返そうとしたら次官が「ちよつと失礼……」と言つて横から手を出して書類を見てる。もつと恥ずかしくなつて、顔が熱くなつて来た。

「ふくん……まあ、これでも良いか？」

そう言う次官から書類を受け取った事務員さん、チラツと見て一瞬、静止してたけど。すぐに「これで良いです」と言つたのでホツとした。ああ、すごく、恥ずかしい。やだな。

それからアタシたちが並んで事務棟から出てゲートへ向かうと、次官が話しかけてきた。

「ごめんよく。気分悪くしないでネ。オレも一応、事務官だからさ。出してからごちやごちや直されるよりは、良いだろ？」

「は、はい。ありがとうございます」

謝つたフリ。半分、上の空。やっぱアタシ、思つた以上にシヨツクだったかな？

基地のゲートでは、事務所で貰つた通行確認証を渡して、すぐに敷地から出た。空からも見えてたけど、基地の外は砂地に畑と雑木林……要するに田舎じゃん。こんな田舎にある鎮守府って？想像を絶するなあ。あいつは、何でこんな田舎に、わざわざ……。

「ほら、迎えが来ているよ、おくい！」

はつと我に返つた。次官が手を上げると少し離れた道路に白い文字で小さく“美保鎮守府”って書いてある軍用車が停まつた。新車？すごくキレイな車両。軍用車の新車なんて初めて見た。アタシたちが近づくと、直ぐに運転台から小さな女の子……多分、艦娘が降りてきて、敬礼した。

「美保鎮守府所属、駆逐艦“電”です。お迎えに上がりました！」

アタシたちも立ち止まって敬礼をした。

「海軍省本庁所属の事務次官だ、ごくろうさん」

「横須賀鎮守府所属、駆逐艦“清霜”です」

「お久しぶりなのです、次官」

その艦娘は、やたらニコニコしている。なに？この艦娘……次官と知り合い？ちよつと引いた。アタシたちは、促されるままに軍用車に乗り込んだ。

〈境港市：電ちゃん〉

その電という艦娘は、アタシと同じ駆逐艦だ。背が低くて、ホントに運転するの？……って感じだったけど。意外と器用に運転している。何となく、話し方で、そそっかしい艦娘かなって思ったけど、見掛けによらないのね。

「今日は遠くからお疲れ様なのです」

電は言った。

「いや、今日は空軍の定期便で来たからね。数時間ってところかな？列車よりはるかに早くて、楽だよ」

次官が答えてる。

「そうなのですか」

なんだか、独特の喋り方をする艦娘ね、この娘も。

「電ちゃんもだいぶ、運転がうまくなったよね」

次官が褒めている。

「そうのですか？」

「うん、そうだよ」

何か二人の会話を聞いていたら、まどろっこしくてイライラして来た。でも、こんなことで腹立てたら変に思われるだろうからガマンした。

「そういえばブルネイにも電ちゃんがいたなあ」

次官が急に思い出したように言う。

「あ……それって、量産型ですよね？」

電は応える。

「うん、それぞれ。美保は、まだ作らないんだ？」

と、次官。作らない……って、何？

「そうなのです。私たちの鎮守府でも、建造施設を作るか、司令官がずっと悩んでおられましたけど……結局、しばらくは作らないような

のです」

運転しながら、電は応えた。

「ええ？何で？」

思わず突っ込みを入れてしまった。ハンドルを握りながら硬くなっている感じの電をよそに、アタシは続けた。

「量産化技術が確立したから、私たちは敵に圧倒的な優位に立てるのよ？（……って、姉さんたちが言ってたけど）おたくの、しれーかは、どこか、おかしいんじゃない？」

ああ、ついに言ってしまった。でも、アタシには考えられないことだから。

ところが、アタシがちよつと“しまった”と思った時には、その電という艦娘は半分泣き出してしまった。

「ぐひっ……司令官だつて、ずっと悩まれたんです……うぐっ……敵にも勝ちたいけど、量じゃないって……私たちを誰一人、絶対に沈めないから理解してくれて。量産化は、まだ見送るって言われて……」

あゝ……事情は分かったから。頼むからさ、ハンドル握ったまま泣かないで欲しいわ。でも、それを聞いてアタシはなぜか、よけいに頭に来た。それは理想論でしょ？敵を叩くには、ある程度の犠牲は不可欠だからこそ、量産化技術によって、不足分を補って、姉さんたちがよく言ってる……でもアタシの考えは次官の言葉に分断された。

「ま、清末の考え方がさ、海軍では常識だよな」

なぜか、内容と呼び方に、ダブルでカチンと来たわ。次官！アタシは清末じゃないんですけど……と、思った。

でも彼は続ける。

「美保の司令の考え方もオレはわかるぜ。事実、美保は今の司令が着任してから轟沈ゼロだ。これだつて立派な戦果だと思ふよ。山陰の防衛も、きちんとこなしているし、オマケに、ここは珍しく陸海空の連携が良いしな」

結局、彼はアタシの名前の間違いには気付かずに、座席から少し身を乗り出すと電に語りかけた。

「電ちゃん大丈夫。良い司令官じゃないか。これからも支えてあげなさい」

「ブヒツ……はい、なのです」

なんで次官が、このしれーかんの肩を持つのが良く分からない。

「鼻かみなさい、電……」

アタシは嫌だったけど、ハンカチを差し出した。

「あ、ありがとう……なのです」

鼻をかむ音は、聞きたくなかったのでアタシは慌てて耳を塞いで窓の外を見ていた。

〈境港市：美保鎮守府〉

畑の中の細い路地を通り抜けて大きな幹線道路に入ると、長い松林だ。そして海が見えた……日本海だ。道路からはちよつと距離があるけど、やっぱり海はいいよねーと思う。でも何となく日本海つて、いつも見えている太平洋とは違って、大人しい印象を受ける。これも噂どおりかな？

すぐ、遠くに赤いレンガの建物が見えてきた。あそこが美保鎮守府のようね。さっきまでベソをかいていた電ちゃんだけど運転は、きっちりしている。アタシのいる横須賀は都会だし、軍用車の運転が出来る艦娘は多くない。ましてや駆逐艦で運転できる艦娘は、ほとんどいないから、ちよつと感心した。

「もう直ぐ到着するのです。正面玄関に着けるのです」

「了解」

そう言いながら、次官は降りる支度をしている。やがて信号を右折して、小さな水路を渡ると、右手に鎮守府が見えた。ああ、やっぱり小さな鎮守府。軍用車はそのまま、鎮守府正面玄関に乗り入れた。アタシたちが車を降りると、大きな声で挨拶をする艦娘たちがいた。

「いらっしやい」

「お待ちしてましたッ！」

「いらっしやいませ」

ええ？いきなり……冬で、寒いのに、わざわざ玄関先で、お出迎え

？何なの？ここは。

「やあく、皆あく。元気だったあ？」

え？次官って、この艦娘と顔見知りなの？しかも全員戦艦……金剛型が3人いるのね。

「もう、バツチリね〜」

「次官の、おかげ様ですっ！」

「いつも、ありがとうございます」

「良いねえ〜ここに来ると、いつも癒されるよなあ〜」

次官、鼻の下が伸びまくってますよ……え？いつも？ってことは……アタシは、この次官が初めて美保鎮守府に来たのではないことを改めて悟ったの。

〈美保鎮守府：ロビーで歓迎〉

ロビーに入ると、いきなり雷のような光があって、びっくりしたけど。よく見るとカメラだった。

「あ、ごめんなさい！初めての人が居るとは思わなかったんで」

青い髪でカメラを抱えている、この艦娘は？

「青葉です、取材記者の。よろしくお願いします……次官も、お元気そうで」

「ああ、君もな」

この人も知っているんだ。

「えへへ、私は元気ですよ〜！」

そう言いながら、バシヤバシヤとシャツターを切っている。新聞記者か、ちよつとウザいなあ。

すると階段の上のほうから、かん高い声が響き渡った。

「あく来たよ〜、来た来た、清霜だあく〜」

この声は……「巻雲？」

言うが早いか彼女は、だぶだぶの腕を振り回しながら凄い勢いで階段を駆け降りてきて、アタシに激突した。

「あ痛〜っ」

「あ〜ごめ〜ん」

巻雲は謝っているつもりらしいが、アタシたちはロビーでひっくり

返った。がやがやと艦娘たちが集まって来た。次官は腕を組んでニヤニヤしているし、もおく、恥ずかしい!

「大丈夫ですか?」

和服っぽい服装の、お母さんのような艦娘が手を貸してくれた。

「巻雲さんも、気をつけなきやダメですよ」

「はあくい、ごめんなさい鳳翔さん」

違うでしょ巻雲!謝るのはこっちでしょ?

「ねえねえ、今日は何も無いっぽい?」

変なりボンをつけた金髪娘……これも艦娘なの?次官にオネダリしてる。でも、もつと凄いのがいた。

「ねえくお土産は?」

連装砲を連れたバニーガール?にしてはムチャクチャな服……案の定、次官は、もつと鼻の下が長くなって、デレデレになっている。

「いやあく、島風ちゃんには、特別枠があるんだよなく」

「えく!ズルいっぽい!」

さつきの金髪リボンが怒っている。

「そ、そうなのです次官!ひいきはダメなのです!」

いつの間にか電ちゃんも、加わってきた。

「あはは、ごめんごめん。ちゃんと皆の分もあるからさく」

そう言うなり次官はスーツケースを開き始めた。何となく間抜けそうな男かと思っていたけど、とんでもない色男だったようだ。

〈へロビー:衝突〉

しかし、次官もトンでもないけど、お土産に群がる艦娘たちもどうかしている。無性にイライラして来た。こんなダラけた鎮守府が本当にシナと戦って、全国に名を轟かせたっていうのかしら?信じられない思いと、横須賀のピリツとした雰囲気との違いに、すぐくガツカリした。もう呆れてしまった。なんで、こんな鎮守府に全国から見学が殺到するのかしら?

「清霜?」

背後から聞き覚えのある声があった。これは……

「秋雲?」

アタシが振り返ると、そこには秋雲が居た。

「……久しぶりだね、清霜」

どこことなく、よそよそしい感じがするけど無理も無いよね。最後に出会ったのは秋雲が失踪する前の晩だったから……その秋雲のよそよそしさと、ロビーのだらけた雰囲気と、彼女の失踪のことが一気に思い出されて急に頭に血が上った。気が付くと、アタシは彼女の頬を叩いていた。

鈍い音がロビーに響き渡った。あちやく、またやってしまった。秋雲は、いきなりの出来事に目を丸くして頬を押さえて、立ちすくんでいる。

でもアタシは止まらない。それまで溜まっていた物を吐き出すように一気にまくし立てた。

「あなた……よくもまあ、こんなところでヌケヌケと……どれだけ皆に迷惑をかけたか分かってんの？」

ロビーの空気が一気に凍りついた。でも秋雲は頬を押さえたまま、こつちを見て言った。

「いきなり、酷いよ……」

確かにアタシのほうが先に手を出したから、悪いかもしれない。でも、秋雲のその言い方に、よけいに腹が立ってきた。こうなったらもう後には戻れない。

「何が酷いって？アンタが、やらかしたことの方が、よっぽど酷いわよ！」

秋雲の横で、巻雲がダブダブの腕で必死に止めようとしている。その様子に、なおさら腹が立ってきた。アタシは構わず続ける。

「だいたい何？脱走って！下手したら軍事裁判で牢屋行きよ！それが何よ？釈放く？しかも日向さんが身代わりになったって言うじやない！どつちが酷いのさー！」

急に秋雲が青ざめた。あれ？ちよつと……言い過ぎた気がした。もしかしたら、そのことを秋雲は知らなかった？マズイなあ〜という思いが何度も頭をよぎる。でも口が勝手に回る感じ。このロビーでアタシだけ浮いているのがすごく良く分かる。

ごめん秋雲。あなたが憎いわけじゃないんだけど、何だろう？自分でも、もう訳が分からなくなってきた。しかも巻雲が、すごく青くなつて固まつている秋雲に寄り添いながら振り返つて言った。

「清霜も言い過ぎだよ……」

巻雲が珍しくシリアスな顔をして秋雲を庇っている。その姿にアタシは自分が悪者のような自己嫌悪な気分になってきた。でも秋雲は……いや巻雲も含めて皆、アタシが嫌いなんだ。だからこっちに逃げたんだ、きつと。

そのひと言で、よけいに哀しくて腹が立って、世の中みいくな滅んじやえ！っていう気になった。気が付くとアタシは玄関から寒空の下へと駆け出していた。

〈鎮守府：埠頭〉

気が付くとアタシは埠頭に座っていた。この埠頭からは、あの何とか富士が良く見える。でも、今は2月だから、さすがに寒い。埠頭の海は、妙に青黒い。アタシの鬱屈した想いを表しているようだ。

「はあ〜」

息が白い。そして、直ぐに突つ走る自分が、自分で嫌になる。どうしてアタシって、こんなに気が短いんだろう。

「どうしちゃったの？」

あの次官がやってきた。

「皆、ビックリしちゃってたよ？……んしょ！」

次官はアタシの横に腰をかけた。

「申し訳ありません」

アタシは頭を下げた。でも、次官は普通の表情で腕を組んで、アタシと一緒に何とか富士を見詰めていた。

「実はね、君の事は横須賀の提督にいろいろ聞いているんだ。最近、不安定だとか……やっぱり、あの脱走の件が原因？」

やや凶星だ。でも、それだけじゃない気がする。

「いえ……自分でも、良く分かりません」

アタシは海面を見詰めたまま答えた。カモメみたいなのも飛んでいるな。

「良いよ、良いよ。自分を責めなくても。たまには爆発しないよね」
あれ？この次官って、こういう人なの？と……優しいんだ。ちよつと意外だった。

「あの〜」

背後から誰かが来た。前髪を垂らした……艦娘？

「司令官がお待ちですが、どういたしましょうか？」

「ああ……」

次官は振り返りながら返事をする、再びこつちを見た。アタシは意を決したように立ち上がった。

「ご迷惑をお掛けしました。しれーに、ご挨拶に伺います」

その艦娘は、ちよつと微笑んだ。きれいな人だな……

「神通と申します。では、ご案内いたします」

アタシたちは彼女について、鎮守府の建物に戻った。

〈鎮守府：提督執務室〉

廊下を歩いていても、何となく距離を置いて遠くから観察されているような気持ちになる。仕方ないな。初めて来た鎮守府で、いきなり大喧嘩するのはアタシくらいだろう。猛獣か何かと勘違いされたかもしれない。

2階へ上がると神通さんが提督執務室のドアをノックする。「はあい」という女性の声。秘書艦かな。

「神通、入ります」

ドアを開けて、彼女が一礼をし、その場所でアタシたちを案内してくれた。アタシたちはそのまま執務室へと入った。

「次官殿、お待ちしておりますよ」

正面のデスクで美保鎮守府のしれーかんらしき男性が立ち上がり、敬礼をしていた。その横にも、同じく秘書艦らしき艦娘が敬礼。うわ、この人も美人だな。

「やあ、久しぶりだね〜」

次官が敬礼するので、アタシもあわせて敬礼をして、慌てて自己紹介をした。

「よ、横須賀所属の駆逐艦“清霜”です。お願いよろしく……あれ？」

そこで、皆が笑ってくれた。恥ずかしいけど、アタシも気が楽になった。

「ああ、よろしくね」

へえ、次官もそうだけど、このしれーかんも、割と気さくそうなタイプだな。でもこのしれーは、なんで建造施設（工廠）の設置を認めたらがらないのだろう？そんな疑問が思い出された。

「とりあえず、座ろうか……神通、鳳翔さんに言っつて、お茶を……」

そのしれーかんが言うが早いか誰かがドアをノックした。神通さんがドアを開けると鳳翔さん……ああ、あのお母さんみたいな艦娘が立っていた。

「お茶と珈琲を、お持ちしました」

彼女は出来るな。

〈鎮守府：提督執務室〉

「今回はさあ、本省の査察と、横須賀鎮守府からの視察を兼ねているんだが、査察のほうは、別に変ったことは無いよねえ」

次官は分厚い資料を、パラパラとめくっている。本気で見る気はないようだ。

「そうですね。変わったことがあれば、電信で都度、流していますし、本省でも電信記録は残っていますしねえ」

美人秘書艦が応える。

「だよなく。だいたい、査察なんてさ、大きな問題が無ければ別に、必要なけどまあ、オレに取っちゃ、美保鎮守府に顔を出せるだけでも楽しいから良いけど」

やっぱり、この次官は目的がいい加減だと思った。

「新しい車、ありがとうございました」

しれーかんが、次官にお礼を言った。ああ、あの軍用車、やっぱり新車か。

「いや別に、俺がお金出したわけじゃないけどね。ちよつと圧力はかけたけど」

次官は笑っていた。

「それ以前に、君たちの戦果がモノを言ったよね。ブルネイでは大

活躍だったからな」

「いやいや、あれも」 たまたま勝った」 って感じだから」

「まくた、またあ」

そんな、田舎の井戸端会議みたいな会話が続けている。

「それで、横須賀のほうは、具体的に何を知りたいですか？」

美人な秘書艦が今度はアタシを見た。慌ててアタシは横須賀のしれーかんから預かった文書をカバンから取り出して、封をしたまま彼女に手渡した。秘書艦は封を開いて中の文書に目を通した。秘密文書？ちよつとドキドキした。

「ええつと……艦娘同士のトラブルへの対処方法。それに、美保鎮守府での規律で特筆すべき点……。そうですね、何かありますか？司令？」

彼女は、しれーかんに問いかけた。美保のしれーかんはちよつと上を向いて考えるしぐさをした。

「トラブルねえ〜最近無いよね。表に出ないだけかな？」

「うふふ、そうかも知れませんがね」

秘書艦は微笑みながら答えた。一瞬、彼女の背後に華が見えた。

〈提督執務室：第2の質問〉

「うんうん、それはあり得るぞ」

なぜか、次官も割って入って来る。彼は続けた。

「二番目の質問だけど、だいたい美保に規律なんて無いだろう？」

頭の後ろで手を組んだ次官が問いかける。しれーかんは答える。

「そうだな〜、いや完全にゼロというわけではないけどね。でも艦娘たちが自主性を以って自律的にやってくれているから、それはそれで良いんじゃないかな？」

「祥高の意見は？」

次官は秘書艦にも聞いた。え？秘書艦を呼び捨てって、何なの？この次官……あれ？でも「祥高」って名前、どこかで聞いたような。

「はい、それで問題ないと思いますが」

祥高さんが答えた。えーつと、誰だっけ？

「そうだよね〜ははは」

そして、3人で笑っている。何？このほのぼのしたムードは。これが海軍の鎮守府なの？横須賀は、もつと全体がビシツとしていて皆がバタバタ動いている。そこまで考えて、あれ？と思った。バタバタ動いて……って、何となくここにいると横須賀のほうがおかしいのかな？っていう妙な気持ちになってくる。それで良いのかしら？

「まあ、強いて艦娘のトラブルと言えば」

美保のしれーかんは、珈琲をすすりながらアタシを見た。

「さっきのロビーでの大喧嘩。あれくらいだろうか？」

「あ……」

アタシは急に、全身が火照るような気がした。多分、赤面しているだろう。

「す、済みません！」

思わず立ち上がって、頭を下げていた。

「だよな〜」

今度は次官がアタシ見た。相変わらず、頭の後ろで手を組んだままだ。

〈提督執務室：ばら色？〉

次官は続ける。

「さっきも言ったけど、横須賀の提督からさ、君のことを心配されているんだ」

「え？……まさか？」

そんなはずはないと思った。横須賀は、ここよりもはるかに大きいし、艦娘も、一般の艦艇も、兵隊もたくさんいる。しれーかんなんて、アタシには雲の上の存在だから、単なる駆逐艦の自分のことは、ほとんど気にかけていないと思っていた。

「まあ、座りなよ」

次官が言うので、アタシは、すみませんといいながら大人しく座った。

「査察なんて簡単に終わるから。今回は、全部君のために動いても良いんだよ。さっきも言ったけど横須賀の提督は知り合いだからさ。君の事、よろしくって頼まれているんだ」

またまた、全身が火照るような感覚になった。え？そんなこと、あり得ない！っていう思いと、すごく“ばら色”に包まれるような、ほんわかしたイメージがアタシの中で交差した。

「あ、あの〜」

アタシは疑問を聞いてみることにした。

「質問しても、よろしいでしょうか？」

「どうぞ」

美保のしれーかんが答えた。あまり“司令官”と言う立場の人と直接会話することは、横須賀ではめつたに無いことだから、ちよつとドキドキする。

「秘書艦の祥高さんって、どこかで聞いたような気がするのです……」
アタシはちよつとぎこちなく質問した。その秘書艦、祥高さんは、微笑んで答えてくれた。

「私はもともと、横須賀に居たことがありますから、そちらで私をご存知の方も居ると思いますよ」

「はあ」

「本省の作戦参謀の、お姉さんだよ、祥高は」

次官が割ってはいいる。何でこの人は、さつきから呼び捨て？祥高さんは、微笑んで続ける。

「もともと中央に出入りしていましたからね。次官とも顔見知りですし」

「はあ」

「横須賀では、あの艦娘……秋雲が、すごく慕ってたんだよね？」

しれーかんも、付け加えた。

「へ？」

なに？秋雲って、そうなの？

「そうみたいですね。私には、そんな実力も何もないのに……」
「まくたまた、祥高はいつつも、謙遜するんだよな〜」

また次官が割って入る。でも、田舎に居るってことは、訳あり？左遷ってやつ？ますます、分からなくなつた。

〈提督執務室：成長が遅いの？〉

「でも、今回は君も、休暇だと思って、羽を伸ばしたらいいよ」
また、突然妙なことを言う次官。

「そうだね。いろいろ、ストレスでもたまっているじゃない？都会でしれーかんも、突っ込んでくる。」

「いえ、そんなことはないです」

慌てて否定するアタシだった。

「何となく、つい言いすぎちゃうってこと、あるの?」

突然、祥高さんが優しく聞いてきたので、逆にドキツとしてしまった。

「あ、いえ……」

でも、凶星。アタシ、何かの拍子に、つい言いすぎることが多い。何でだろう?」

「もしかして、末っ子?」

また、鋭い質問が飛んできたので、ハツとした。

アタシがドギマギして答えられないで居ると、次官が答える。

「そうだよ。この娘は、夕雲型の最終艦だから、末っ子」

それを聞いた祥高さんが言った。

「ああ、やっぱり」

「……」

もう、何も言えなくなってしまった。いや、困っているのではないけど。

「そういえばさあ……」

次官は、ポケットから手帳を取り出してめくり始めた。なんだろうと思っていると、意外なことを語りだした。

「清末は2月の末……2月29日生まれの子だから、末っ子もいいところ。だから『清末』で良いんだよな。結局さ、よけいに背伸びしたいのかなあ〜って思うんだけど」

「な、なにを……違います!」

「へえ〜、どう違うんだ?」

次官はマジメに取り合ってくれない。

「何ですか?それ」

祥高さんも、聞いている。

今度は美保の、しれーかんが説明する。

「今年もそうだけど、うるう年と言って、4年に一回しか来ないんだ。清霜はその29日生まれだから……そうかあゝ4年に一回しか誕生日が来ないんだ。だから他の艦娘よりも、よけいに成長が遅くなるんじゃない？」

ちよつと、何なの？その変な理論……てか、美保のしれーかんも悪乗りして、やっぱり頭がおかしい？

「ええ？そうなんですか？へえゝ」

ちよ……秘書艦まで、納得しないで下さいよ！

「だよな、やっぱりそうだろう？」

次官まで……アタシは慌てて否定した。

「ち、違います！絶対に違う！」

つい、立ち上がってしまった。

すると、次官が食いついてきた。

「へえゝ、じゃあ、何がどう違うって言うんだ？清末」

その名前は違うけど、アタシは名前は無視して、弁解をする。

「だから……誕生日って言うか、そういうことじゃなくて」

「どういうこと？」

これは美保のしれーかん……。

「……」

言葉に詰まった。そういえばアタシ、何を焦っているのだろうか？怒りっぽくなつてさ……。でも、もしかしたら、次官の言うとおり、4年に一回しか誕生日が来ないから、成長が遅くなってるのかな？……末っ子だし。みんながアタシのことを、気にかけてくれるんだけど、それは当たり前だとずっと思っていたから……やっぱり、アタシがおかしいの？アタシが、成長が遅いの？どうなってるの？

そこまで思いつめたら、急に哀しくて、寂しくなつてきて、ボロボロと涙が出てきちゃった。

「あ……」

アタシがボロボロ泣き始めたので、執務室の皆が慌てている。だ

め、止まらない涙。そう、アタシはきつとそうなんだ。末っ子で、いつも皆から可愛がられて。でも誕生日は、いつも忘れられたり、誰かと一緒だったりして……やっぱり、アタシって寂しいんだ。それで、きつきもロビーであんなことを……秋雲のことだって、きつとアタシの心のどこかで、あの脱走も、羨ましいと思っていたに違いないんだ。アタシには、絶対に出来ないから……。

そう思えば思うほど、自分が可哀そうで、悲しみがこみ上げてきて、もう、次から次へと滝のように涙が出てきた。泣きすぎて、頭がクラクラしてきた。それでも、ふらふらと歩き出したアタシは、なぜか部屋から出ようとしたらしく、ドアのほうへと向かった。でも、やっぱりバランスを崩して、そのまま床に倒れたらしい。皆が慌てて、駆け寄る気配がした……後の記憶は無かった。

〈提督執務室：癒し〉

気が付くと、アタシは誰かに抱かれていた。ハツとして、体を起こそうとしたら、『大丈夫?』という声。これは、秘書艦の祥高さんだな……と思った。

「大丈夫です」

そう言つて、意識を取り戻すと、目の前には、あの祥高さんの綺麗な笑顔のアップだった。彼女はアタシを抱っこするようになって覗き込んでいたんだ。優しい眼をした秘書艦だなくと思った。横須賀では秘書艦って言うのと、強くて、キビキビしていて、しれーかんと同じくらい、近寄りがたい雰囲気だけど……ここは、ちがうんだ。何だか、お母さん……? 本当のお母さんって知らないけど、そう感じた。

「司令も次官も、鎮守府内の査察に出かけてお留守よ。しばらく、ここで休んでいたら良いわ。私もここに居るから」

そう言われたけど、アタシはだいぶ元気になったと思つたから、「いえ、大丈夫です」と言つて、上体を起こした。でも、何となく、祥高さんからは離れたくないという想いもあつて……身体は起こしたけど、下半身はまだ、祥高さんに身を預けたままだ。祥高さんも、優しく抱いてくれている。何だか……良いな、こういうのつて。やっぱり、アタシは甘えん坊なんだ。でも、祥高さんは、不思議と、甘えて

も許されるような……そんな大きさを感じさせてくれた。

「秘書艦は……祥高さんは、優しいんですね。うちの秘書艦とは全然違うので、ビックリしました」

アタシはお世辞抜きで、そう言った。祥高さんは、恥ずかしそうに笑った……なんだろう、癒される笑顔。

「そんなことないわよ。私なんか、いつもここの司令に恐れられているのよ、私……可笑しいでしょ？そんな怖くないつもりなのにネ」

そう言っただけで彼女。屈託の無い笑顔が素敵だな……。何だか、ずつとずつと、こうしていたい。不思議な人。

「清霜さん……で良いわね？」

祥高さんがアタシの名前を正しく呼んでくれた。

「はい、そうです」

アタシは答えた。祥高さんが語り始めた。

「あなたを見ているとね、私の若い頃を思い出すの。その頃の私もね、対抗意識ばかりすごくて、いつも誰かをライバル視して、勝手に葛藤していたわね……心の中で。でも、ちゃっかりと目上の人には、いい顔をしてね。それって、組織の上の人からの印象は良いけど、同じ艦娘の中では浮いちゃうのよね」

ああ、それだ、まさにその通り。何だか不思議、心が軽くなっていくようだった。アタシは体を完全に起こして、祥高さんにきちんと向き直った。

「あの……」

アタシは聞いてみた。

「なあに？」

「さつきは否定したんですけど、良く考えたら、4年に一回っていう、誕生日……いえ、進水した日ですけど。私が背伸びしたい気持ちって、やっぱり、そういうところもあると思うんです」

「そお？」

ああ、優しい笑顔だな。この人なら、全部話しても良い。今まで、そういう人が、アタシの周りには居なかったんだよな。

「戦艦のお姉さんたちに憧れるのも、そういうところがあると思うん

です。私なんか、どんなに努力したって、戦艦には絶対に、なれっこないのは分かっているんですけど」

こんなこと言ったらバカにされるかな？って思ったけど。でも祥高さんは違った。

祥高さんは、ニコニコして、凄いことを言った。

「ウフフ……私は重巡だけど、現役の際は“戦艦並みの火力”って言われたわ」

「ええ？」

でも、そのときアタシは思い出した。重巡“祥高”……伝説の三姉妹といわれた一人だ。たまに古い先輩が話してくれたっけ。

「私たちの場合は、特殊だったけど……でも、重巡クラスでは、今でも戦艦並みの艦娘は、何人か居るはずよ。それに、戦艦がすべてじゃないわ。それぞれの立場で、責任を果たせば十分だと私は思うわ」

それは分かるけど。でも、憧れは捨てられません。

〈提督執務室：秘書艦の過去〉

「伝説の祥高型……そういえば祥高さんは横須賀に居られたんですよね」

「そうよ……あの次官が私を気に入ってくれて、変なあだ名付けて、あちこちで話してくれるから、迷惑しちゃうんだけどね」

そう言いながらも、彼女は笑っていた。ああ、あの次官と彼女は、いい友達なんだ。なんか、そういうのって良いなあ……って、思えた。

「あの次官とは、古くからの、お知り合いなんですか？」

つい聞いてしまった。

「そうよ、私が横須賀に居た頃、彼と、私たち三姉妹で、いろいろやつたわ。けっこうギリギリの、きわどい事もね」

「へえ〜」

大人しそうに見えるけど凄いな、この秘書艦。

「怖いもの知らずだったから出来たわね、でもちよつとやり過ぎたわ」

「え？」

「多分、軍の記録にも残っていると思うけど、あるとき敵のものすごい

攻撃を受けて、壊滅的な被害を受けた海戦があつて。それがきつかけで、私は前線を降りたの」

「そうなんですか」

何となく、その海戦のことも、お姉さんたちからも、聞いたような気がする。

「それからもね、いろいろあつて結局、この山陰に来たわ……今の司令よりも先に着任して、最初は私が司令の代理を務めていたけど。うふふ、司令なんて、艦娘がやるもんじゃないわよね」

そう言つて、彼女は笑つた。この人が話すと、凄いことでも嫌味に聞こえないな。

「あなたがつい、強気になつてしまふ気持ちも分かる。駆逐艦の子つて、けつこう、そういうタイプが多いわよね」

はい、凶星です。

「でも、そういう気持ちは大切よ。そもそも艦娘は、もつと自立すべきね。でもね、自立と自分勝手は違うの、分かる？」

「はい……何となく」

「さつきも言つたけど、それぞれの立場で、責任を果たすこと。軍隊では、それがとても大切よ」

「はい……それは分かつているつもりです」

「私たちは軍人である以上、敵と戦うことが最優先。でも、戦う前に、自分たちの内部で対立していたら、とても戦えないでしょう？」

「はい」

「自分を殺せつて言う意味じゃないけど、周りが気に入らないからつて環境を変えようとしても、難しいわね。軍隊なんて昔も今も、やる事は変わらない。だったら、私たち自身が意識を変えたら良いじゃない？それだけで、部隊での居心地が良くもなるし、悪くもなる」

「はい」

「お説教みたいでゴメンナサイ。無理には言わないわ。でも、あなたが本気で変わりたいと思えば、そうしたら良いし。無理だったら……また考えましょう」

そのとき、ドアをノックして、あの“お母さん”が顔を出した。

「お昼は、どうされますか？次官と司令は下で食べられるようですが……」

「そう……あなたも、下と一緒に食べましょうか？」

祥高さんが微笑んだ。

「は、はい」

べ、別に、断る理由はないよね。

〈〈食堂：軽い……〉〉

アタシは祥高さんと一緒に、廊下へ出て、食堂へ向かう。そういえば普通、しれーかんとか次官みたいな政府のお役人は、別室で食べることが多いはずだけどここは、地方だから場所がないのかな？……と、思いながら歩いていった。

今日は晴れているけど、外の日陰には、薄っすらと雪が残っている。寒そうだな。やっぱり、こっちは冬は寒くて、雪も降るのかな？そう思っていたら食堂に着いた。

横須賀よりは狭いけど、割ときれいな食堂だ。先に、このしれーかんと次官が窓際の、ちよつと特別っぽい席に座っていた。あれ？配膳はこれから？数人がパラパラと座って食事を取っているが、何となく引いている感じがする。さつき、ロビーで大喧嘩したから、そのせいだろう。あくあ、失敗した。

このしれーかんがアタシに気付いた。すぐに次官もアタシたちの気配に気付いて振り返ると立ち上がった。

「おお、清末……こっち、こっち」

ですから、その名前違うんですけど。座ったら言ってやろう。祥高さんとアタシがテーブルに近づくと、次官は言った。

「秘書艦殿は、奥の提督の横へどうぞ……私たちはこっちに並びますよ」

仕切っている。アタシは、早く名前の訂正をしたいので、ムツとしながら座った。

「あれ？清おく霜さんは、ご機嫌斜めですか？」

あ、このしれーかんは、さすがだ。危うく間違えそうになっていたけど、アタシの名前をちゃんと覚えていてくれたんだ。ていうか、

それが当然よね。

アタシは嫌味も込めて答えた。

「いえ……次官がさつきから、私の名前を間違えるので」

「あれえ？末っ子は、清末じゃないっけ？」

ぜったい、次官はバカだと思う。

「清霜ですよ？可哀相ですよ、次官」

祥高さんがフォローする。

「ああそっか。祥高に言われたら、直さないとなあははは」

軽すぎる。これで政府の役人なの？

〈食堂：サプライズ〉

全員揃っているはずなのに、なかなか配膳されない。ひよつとして

ここは、しれーかんでも、セルフサービスなの？

それにしては、誰も動かないな……ん？

食堂の空気が変わった。誰かが入ってくるような……あれ？振り

返ると、巻雲と秋雲が二人でケーキを持ってくる。

え？何？もしかして……。

「清霜お、誕生日おめでと〜」

巻雲が、いつもの声で言う。アタシは絶句した。

「あああ……」

言葉が出ない、頭が回らなくなった。

さつきの電ちゃんや、金髪リボンや、バニーガールも乱入してきて、

一斉にクラッカーを鳴らした。

「きゃー」といって……（顔は笑っているけど）祥高さんが伏せた。ク

ラッカーのリボンが飛んでくる。そして、しれーかんでも次官も手を叩

いて「おめでと〜」と、言っている。

あまりにも突然で、初めての体験で、どうして良いのか分からなく

なってアタシは、その場で完全に固まってしまった。

「ねえ、嬉しくないのお〜？」

バニーガールが言う。

「……」

こ、こういう場面でも、頭が真っ白になるんだ……。

「なんか、固まったっぽい?」

「そのようなのです」

「清霜……」

その声にアタシはハツとして、硬直が解けた。ややぎこちなく振り返る。

「秋雲……」

彼女は、「はい」といって、プレゼントをくれた。小さめの額縁に、イラストっぽい絵が描いてある。

「私の似顔絵?」

「ごめんね、今は、それが精一杯。何しろ謹慎期間が長くなってさ、小遣いもゼロなんだ。身から出たさびだよね」

「秋雲……ごめんね」

なぜか、自然にその言葉が出た。絶対に、ぜったいに許さないって思い込んでいたのに。氷のようなアタシの心が、一気に溶けていくようになった。

「やだあ、泣かないでよーらしくないぞー!」

秋雲に小突かれても、涙が止まらなかった。こんなアタシなのに、想ってくれて、ありがとう、秋雲。

〈食堂：パーティー〉

それからは、食堂は簡単なパーティー会場になった。祥高さんも、しれーかんも、あのバカみたいな次官も、喜んでくれている。4年に1回の誕生日だと思っていたけど、誕生日が問題じゃないんだな。

そういえば、今までも、横須賀の鎮守府でも、けっこう浮くことが多かった。でもそっか、アタシ自身が問題だったんだ。最初にアタシが変わらなきゃ。

しばらくすると、また秋雲がやってきた。

「清霜、ごめんね。秋雲さん(私)もさ、日向さんのことは知らなかったんだよ。急に居なくなっただけで……だから、ごめんね」

「な、なんであなたが謝るの?私の方こそ言い過ぎたわ、ごめんなさい」

二人で頭を下げ合っている。秋雲は続ける。

「良いよ……でもさあ、日向さんにはいろいろ教えられたし。自分が引いて誰かが助かるっていうこともあるんだなって」

「ふーん。ここは、本当に自由なんだね」

アタシは呟いた。

「うーん、そうとも言えるかも知れないけど。自由って言うと、規制がないみたいだけど、そうじゃないんだ。艦娘が、艦娘らしく立てるってところ、かな？」

秋雲は、難しいことを言っている。

「良く分からないけど」

アタシが言うと、秋雲は続ける。

「日向さんは、自分で秋雲（私）の罪を背負ってくれたんだなって、今、思えたんだ。そういうこと……日向さんは、誰かに命令されてそうしたんじゃないかって、自分からそう言ったんだ。だからこの誕生会も、巻雲と秋雲さん（私）が企画して許可を貰ったんだ」

「へえ、そういう自由か……」

「そう、そうやって自分たちで考えるから、それがこの艦娘たちの絆になっているんだって……これは祥高さんがよく言うんだけど」

やっぱり、あの秘書艦は出来るな。

秋雲は続ける。

「この軍隊つてさ、命令絶対でもないんだよね。反論も出来るし。でもそれを言うだけの、責任があるんだ。それが自分で考えること。そうやっていくと、誰にも奪われない絆が出来るんだって」

「あなた、なんだか変わったね」

「そお？」

「うん、変わった」

とてももうらやましくも感じた。ここは、小さい鎮守府だから、そういう自由なことが出来るのかもしれない。横須賀でも、それが出来たらいいな。

もしかしたら、これは横須賀のしれーかんに乗せられたのかなあ？

あと、次官と……。でも良いか。

〈食堂：使命〉

それから、パーティは食事だけじゃなくて歌あり、踊りあり、かくし芸アリ。横須賀にも器用な艦娘は少なくないけど、どっちかかっていうと個人プレー。でも、ここ美保鎮守府は、小さいながらも、すぐくアツトホームなんだな。普段からこんなノリなら次官が、査察のたびに、この美保鎮守府やつてくるのも分かる気がする。

あ、でもアタシにも使命があった。ここの、良い所を、横須賀に持つて帰るんだ。さすがにパーティは無理だし。何を持って帰ったら良いんだろう？

「浮かない顔しているジャン？」

紫の髪の毛の……軽空母のお姉さん？が、近寄ってきた。ちよつと酒臭いけど。

「あの、私、横須賀鎮守府からの視察という目的があつて、でも、今日で帰らないといけないから、こんなことやつていいのかなって？」

すると、もう一人の白いリボンの……やっぱり、軽空母のお姉さんが来た。

「へえ、そうだよね。わざわざ都会から、こんな田舎に視察に来るんだモンね手ぶらじゃ、帰れないわよね」

「そ、そうなんです」

アタシが応えると、さっきの軽空母のお姉さんが言った。

「そんなの簡単ジャン、酒飲み過ぎたつてことにして、延泊しちやええば？」

「あなたねえ、そんなこと、出来るわけ無いじゃない！」

いつのまにか、二人で討論が始まってしまった。でも、なんだか、この二人の軽空母のお姉さんたち、漫才みたいに、ほのぼのしているなあゝつて思えた。

すると、ちよつと出来上がっている次官がアタシの隣にきて座つた。だいたい、昼まっからお酒飲むって、どういう根性しているのかしら。

「それだあゝ」

「はい？」

「今日は日帰り止めた！延泊しようぜ！なあ〜清末！」

「だから、清末じゃありません！」

この次官は絶対バカに違いない。

「オレが良いって言えば、あとは書類に判をつけて置けばオツケーだよ〜」

次官、大丈夫なのかしら？

「ちえ〜、日帰りしないならサア、昼まつから飲まないんだけど」

……ていうか、普通、鎮守府の敷地内でお酒飲む？しかも、昼まつから！

「温泉だ！皆生温泉、行こうぜ！」

次官、ノリノリです。

「次官、さすがにそれはマズイでしょ？」

しれ〜かんが、口を挟んでくれる。そういえば、しれ〜かんは、さすがに呑まない。当たり前だけどね。

「そつか〜」

この次官は、やっぱりバカに違いない。

「まあ、次官がオツケーなら、書類は良いとして……、でも理由を考えたとき、横須賀だって困るでしょ？」

しれ〜かんが言う。それを聞いて、ちよつと正気に戻ったらしい次官、思案している。

「せっかくですから、雪中行軍訓練（スキー）ということで、大山へ行くのはいかがでしょうか？」

祥高さんが知恵を出した。

「それ、良いね。じゃ、有志を募って、大山で雪中行軍訓練（スキー）。その後に、疲労回復で皆生温泉つてのはどうかな？」

しれ〜かんが、方向性を出した。

『賛成〜』

なぜか、その場に居る艦娘たちが、一斉に手を上げた。結局、そういうことになりそうだ。

「え〜、雪山か？オレ、運動は無理……」

次官が珍しく尻込みをしている。

「では、次官には、このまま今日の便で、お戻りいただいて、清霜さんだけ、訓練のため延長ということだ」

メガネをかけた艦娘が、次官に釘を刺すようにいう。

「大淀さん、それは殺生なく」

一気に酔いが吹っ飛んだような次官の姿に、その場に居た全員が笑った。何だか、すごく良いなあ。

「清霜さんは、どうしますか？」

祥高さんが聞いてきた。そうだった、一番肝心なことを忘れていた。アタシが当事者なんだ。でも、アタシは迷わずに応えた。

「はい、横須賀ではほとんど雪も降りませんし、ぜひ、訓練をお願いします！」

結局、次官と共に、それからなんと一週間近くも、美保鎮守府に留まる羽目になってしまった。その間の、いろんなエピソードもあるけど、それはまた、別に機会にお伝えできれば、と思います。

報告者 駆逐艦 清霜